

# 宿世と来生 (上)

金子 大 榮

(大谷大学名誉教授)



はじめに

ことで、老人になると、意気沈滞しておりますから、課題に励まされて、元気になるのかもわかりません。

仏教・真宗・宗教

先年、大谷大学の集中講義として「真宗概論としての教行信証の概要」という題目を与えられました。これを引き上げた時は少々困ったのですがそれがわたくしの役割であるということになると気乗りしまして、この問題に取っ組んでみたのであります。「教行信証」については、いままで幾度も講義をしましたが、それを真宗概論という角度から見ていこうというのははじめてであります。概論といえは最初に若い人が考えていいはずのものであるが、じつは年寄りの仕事だということも聞いております。そのような

そこで概論の部に「真宗は仏教である、しかしながら仏教は必ずしも宗教でない」、ひとつこんなふうがいい現わしてみることになりました。あるいは「真宗は仏教にして同時にまた宗教である」、こういい現わしてもよいのであろう。こういうと事新しく聞こえますけれども、内容的にもうしますれば、昔からいい古されたことであります。仏教というものは、本来的の意味においては聖賢の道であ

る、聖者といわれ、賢人といわれる人の道である。だから聖道の教えともうしますが、あの聖道というのは聖者の道という意味でありまして、仏教は本来聖者の道でありませぬ。その聖者とは、愛欲名利を離れ、世間を超越して生死解脱の法を求めるものであります。人は、この世に生まれて、やがて死ぬ、とうぜんのことではありますが、その生を脅すものは死である。考えてみると、愛とか憎しみとか名聞とか利養とかいうておることも、生の本能に依ることであらう。それで人間がつこうよくゆくかという、そのために争いも起こり、わずらい、悩みも起きて空しく一生をおくってしまうのである。だから、人間としての最初に心がけねばならないことは、生と死とに縛られない道を求めることであらう。その生死を離れる道が仏教である。ということ、お釈迦さまが、家を捨てて妻子を捨てて修行せられたのも、その生死解脱の道を求めることでありました。ですから、形の上からもうしますれば、隠遁して独身の生活をし、心の上からもうしますれば生死を解脱した涅槃をさるとというのが仏教であります。

そういうことで近くは道元禪師のお書きになったものなどを見ましても聖道とはそういうものであるにちがいない

ということがよくわかるのであります。無常迅速、生死事大なりでありまして、いつ死ぬかわからない世の中である、だから急いで、生きてよし、死んでよしという涅槃の境地を身証せなければならぬ、それが菩提心というものであり、それが仏道を求める心というものである、その心がさかんでさえあるならば、色に迷うだの、利に迷うだのということはないはずである、そういうことに迷うことは、そもそも道心がないからである。しかるに、世の中には悟りを開いたらまた愛欲の生活に入ってもいいではないか、名利の中へ入ってもいいではないかという人があるが、それは笑うべきことであると道元はいつております。そもそも道を求めるという精神から出家したのであるから、出家僧として修道者として一生を貫くべきものである、そういう意味において、世間をこえて、悟りの道を求める、それが仏法というものであります。

その仏法としての真宗である。という点において真宗も生死解脱の道を求むるものであるということには変わりはない。しかるに、真宗は愛欲の中におりながら、人間生活のうちにあるながら、しかもその生死をこえる道を求めていこうというのである。その点においては、まったく仏教

の中でも特殊のものである。それは仏教でないように思われたこともあったのであろう。これについて思い合わされることは「げんどうしやくしょ元亨釈書」という日本の高僧伝がある、その中に法然上人は出ているが親鸞聖人のことは出ておらないということであります。それは出家僧でないから、したがってその真宗も本筋の仏教でないように思われたのかも知れませぬ、その仏教でないように思われている点を今は宗教という名にしてみよう。ここでは宗教という定義の吟味は差控えて今日一般に行なわれておる宗教、新聞が考えておる宗教、文部省で考えておる宗教、クリスト教も、天理教も、金光教も、新興宗教もみんな含んでおる宗教、そういうような宗教の仲間へ真宗も入れて考えて見たいのである。これはわたくしとしては心外に思われることもあるのですが、ともかくそういうことを少し考えてみなければならんようになってきたのであります。仏教は宗教であるが、レリジョンではない、しかるにそのレリジョンが宗教と訳せられた今日ではかえって仏教は宗教ではないといわなければならなくなつた。真宗もその宗教の中へ入るといふことになれば、真宗は仏法であつて、また宗教であるといふことになりましょう。この場合には真宗は、真実の宗

教であるということになるのであります。それは何を意味するかというと、同じ仏教であつても聖人賢人の仏教でなくして庶民の仏教である。この庶民という言葉はだんだん通用できなくなつたかもしれないけれども、しかし浄土教に育てられたわたくしたちにとりましては、懐しみのあるものであります。民草というような言葉、仏教では衆生、あるいは羣萌という。真宗はその庶民の仏教であるという点において一般の仏教とはちがう。だからその羣萌の仏教であることを宗教という名にするならば、真宗は生死解脱の法を求めておるといふ点において仏教であるけれども、それが庶民の上に行なわれるのであるという点においてまさしく宗教といわれるものであろう。その宗教といわれるものは、生死問題だけでなくして人間生活を問題とするものである、こういつていいと思うのであります。

今までわたくしは人生における問題と人生そのものの問題と分けて、多くの宗教は人生における問題に答えようとするものであり、真宗は人生そのものを問題とするものであるところもいつてきました。そうすれば、人生そのものを問題とするという点においては、真宗も依然として仏教であります、しかしそれにしても人生というものを人間

の生活として問題としているところに真宗の特徴があるの  
であります。

### 「現在」の意味

今日は話が少し煩雑になるかもしれませんが、ここで現在  
というところについて考えてみましょう。現在という考  
え方はおおよそ三つあると思うのであります。一つは、現在  
とはたゞいま、わたくしはこれを即今の現在ともうしてお  
ります。即今というのはずなわちいま。もつといい言葉が  
あるかもしれませんが、ただこうしているこのいま。それ  
は即今のいまでありますから、昨日にあらざり明日にあらざり、  
あるいは今朝にあらざり今晩にあらざり、ただいま、これが現  
在。現在とは現にここにありとあることとあります。道元  
禅師のお書きになったものなどを見ますと、この即今を現  
在と考えておられた。それが前後際を断つということであ  
りましょうか、いまここにあり、そのいまである。その  
いまの生は死に移る生ではない。生としての現在である。  
そこには死に縛られない生のあることをさとらねばならな  
い。しかれば生死を解脱するということは、要するに即今

の現在をさとることに他ならぬのであろうか。

第二の現在の意義は一生ということとあります。お母さ  
んの胎内から生まれて、お葬式をつとめてもらうまでを現  
在というのであります。わたくしたちは、小さいときから  
覚えた現在が現生で、この世一生ということとありまし  
た。そういう意味の現在が現世のご利益といっている現在  
でありましょう。真宗における現在も、その現生と考えて  
よいのでしよう。親鸞にとつては人間の一生涯というもの  
が問題であった。その一生涯においては、山あり、河あり  
で、老人になると特に思い出の多いこととあります。「山  
重なり水複なりて路無きことを疑う、柳暗花明又一村」と  
いう陸游という人の詩があります。一生涯ということ  
を思いますとしばしばそれを思い出します。山重なり水  
複なりて路なきことを疑う」で、さあこの人間の一生涯は  
どこへ行こうかしらん、道が分らない、こういうふうな、  
しばしば行き暮れると思つておると「柳暗花明又一村」で  
ホッと一息つくところもある、そういうようなことで一生  
涯を終る。その一生涯を何とかして幸福でいきたい、何と  
かして無難でいきたいというところからここに多くの宗教  
というものができておるのであります。親鸞聖人にいたし

まして、そういう一生涯というものがことに問題であったように思われる。もちろん無常ということもお感じになったにちがいない。法然上人は「三五のよはひにて」即ち十五の年に世の無常を感じて出家せられたということでもあります。だから、出家して道を求められた初めはもうすまでもなく生死の問題であつたでしょう。けれども、親鸞聖人は妻を持ち、子を持ちまた京都におることができなくて寂しい越後から東国へと転々として流浪の生活をせられた。その間に感じられたものは、人間はどこまでかわいとか憎いとかいうておらなければならんであるうかなあという、そのわずらい、悩みが問題であつた。お書きになつたお手紙の中に「去年・今年、老少男女、多くの人々の、死にあひて候ふらんことこそ、憫に候へ」というのがある。これは飢饉の年でもあつたでしょうか、人がたくさん死んだ、去年も今年も人がたくさん死にますが、ほんとに哀れなことであります。「但し生死無常の理、詳しく如来の、説きおかせ、おはしまして候上は、驚き、思召すべからず候」と書いてある。どんな気持でああいうことをお書きになつたのか、まあ人間は死ぬということをそう驚かんでもいいだろう、こういうておられます。したがって教行

信証等を見ましても、生死問題よりは愛憎の煩惱について多く語っていられます。それはまた生死問題の中味を愛憎の煩惱として感じられたからでありましょうか。こういう点において同じ仏教であつても、聖道と浄土教では問題とその解決の仕方にぜんぜんちがうものがあるようであります。そこに人生そのものを問題としている真宗も、この世の生活を問題としておるものとあい通ずるものがあるといふことをいいたいのであります。

もう一つ第三の現在は現代ということであります。これは今日の常識であるといつてよいかも知れません。世とは移り行くということでありませう。代とは移り変わるということでありませう。だから現代ということはいまの世、ということであります。しかるに、そのいまの世ということをお考えますとその中心は、今日の人びとのいう社会問題というものになるのでしょうか、現代においてわれわれはどうしたらいいかということが即ち社会人としての問題となつております、しかし現代というものも、要するに人間によつてできておる、社会は人間によつてできておるのでありますから、社会問題といつても人間の問題であるに違ひない。しかして宗教は、おそらく真宗だけではない、すべて

の宗教といわれているものは、人間の問題を人生の問題としておろさないであろうか。社会問題というものも、けつきよく、自分の一生涯の問題としておろすのではないであろうか。こういう世の中に生まれたわれわれの、生涯をどう考えたらいいであろうか、かかる社会の間に生を受けた人たちの一生はどうあるべきであろうか、そういう意味において人生を問題にしておろすのではないか、こういっているのではありません。

### 庶民信仰

ところが、その人生、その現生というものの生き方は、さきほどからもうしたように、どうしたら仕合せに生きていけるかということよりほかに考えておらないのである、そこに庶民というものがあります。それは、親鸞聖人が例をあげられておるように、商売をしたり、百姓をしたり、また漁夫であり、狩り人である人々である、だからただもうどうしたら生きていけるかということよりほかにない人びとであります。そういう人々にしますれば、現世利益のある宗教が相応したものである、こう考えられることでは

ないでしょうか。

話はちよつと糸口を忘れたようでありますけれども、じつは真宗の教えの中に機の深信という教えがある。「自身は現に罪悪生死の凡夫曠劫已来常に没し常に流転して出離之縁有ること無し」という言葉があります。この「自身は現に罪悪生死の凡夫」というのは現生の生活のことではありません。「曠劫已来常に没し常に流転して」とは宿世のことでもあります。「出離之縁有ること無し」は、来世のことでもあります。この世の生活の有様をおさえて、考えてみると、いつが始めとも知らない遠い昔からこんなふうにして流転してきたのである、というのであります、こういう考え方はいったいどこから出てくるのであろうか。人間のあり方を社会問題として考えようとする人にはかようなことはほとんど問題でない、さきの世やのちの世やということは問題でない。また即今を現在として生死を解脱しようとする聖道の教えにおいても、さきの世だ、のちの世だのいうことは問題でない。ただ浄土の教えだけが、さきの世からこういうふう迷うてきたのである、またこのようであるという、どこまで迷うていくかわからないと、さきの世だの、のちの世だのというのであります。とすればこうい

う考え方は仏教からだけ出てくるものではなく、それに先立ちて原始人の思想というものがあつたように思われます。そして今日の新興宗教といつてゐるものは決して新しいものではなく古い宗教であるといふことも思ひ合はれまゝです。人間が大地の上の生活を始めてからあつた宗教、それは学者によりてアニミズムとか精霊信仰とかいわれております。それが身体は死んでも魂は残つておつて、生まれかわりはしてゐないものであるといふのであります。これは庶民の信仰であつて文化人から見ると無知もろまいな野蛮時代の遺物ともいわれましよう。しかるにその思想が機の深信のタネになつてゐるような感じがするのであります。

### 三世因果の思想

そういたしますと、仏教の三世因果というものも、原始人の思想を整理したものと考へられます。そこへ気がつきまして「今昔物語」などを読んで見たくなりました。しかし老人根柢が衰えて読んではおらぬのですが、その中には多くの因果物語があるにちがひないと思ひます。例えばさきの世に牛であつたが、獵師に殺されて、その獵師の息子

に生まれ變つたというような話があるでしょう。わたくしは子供の時分によく聞かされたものであります。その因果物語は、わたくしは信じませんが、しかしその物語の中にも捨てることのできない眞実が感ぜられます。それは原始人のまことであり、また人間の原始的まことといつてよいのでしょう。

そこで仏教でいう六道輪廻といふことを考へてみる。六道の中で一番はつきりしてゐるのは畜生です。畜生といふのは動物であります。しかし仏教では動物といわぬで畜生といつてゐること、これがそもそもおもしろい。畜生といつておかんと生まれかわりになるといふことがはつきりしません。あの人はシシを殺したから息子さんにシシが出たといふ話はない。大てい牛を殺したから牛になつて出たとか、近くにいたへびを殺したのでそのたたりがあつたとかといふのです。こうして畜生とは飼ひならした動物と人間に近づいてゐた動物とであります。そしてその關係がまた親の因果が子に報うといふことになつてゐます。縦は親子の系統であり、横は畜生と人間との間柄である。これが大体民間信仰のものであります。

そのほかに、人間の生活をしてゐる間にずいぶん無理な

ことをして、他人を虐待するというと、その虐待された人は死んで鬼になる。またよい生活をする、死後は神さまになる、ということがある。仏教においてその神さまに代表されるのは天でありましょう。しからば鬼に代表されるものは餓鬼であります。六道の中の天人はよい神さま、餓鬼は、ちょっと当てはまらないようですが、鬼というのですから、人間には悪いあたりをするほうの代表者でありましょう。これに対して善意をもって人間をお護りするのは天人である。そうしますと、六道のうち残っておるのは阿修羅と地獄ですが、その阿修羅、ちょっとタネはわかりません。これは天然神話が入ったのかもしれない。あるいは人間の戦争好きな姿を天然現象の間に見ようとしたのかもしれない。それから地獄ですが、これは要するに、悪いことをしておりながらそれだけの罰も受けないで死んでしまうような人に対して、必ず因果は報うものだと、いうところから考え出したものでありましょう。これで六道ということも納得してもらいたいのであります。

### 原始人の衆生愛

こういうふうな形で因果物語はできておる。だからして原始人は、あるいはご希望によつては野蠻人といつてもいいですが、そういうふうな考えておった。それが、文化がすすんでくるにしたがつてそういうものは皆迷信であり、そしてまったく無知のしからしめるところであるということになった。したがつてそういう思想の上に立つ現世利益の宗教は、何かグロテスクな感じもするのであります。しかし、わたくしは祖師親鸞の考え方をよく思うてみると、いうと、今日インテリの頭でもつて、それは邪教である、迷信であるとはねのけるもの、とちょっとちがったものを感じるのであります。それは何であるか。原始人はそういうような形で、妙なことを信じておったといえればそれまでですが、その底には衆生愛とでもいうべきものがあつたのではないであらうかということでもあります。仏教では人類といわないで衆生という言葉をつかう。この言葉の感覚についてはつねにもうすのであります。衆生とは生きとし生けるもの、というのである。その生きとし生けるものという感情の中には、殺した報いがかわいという恐しさもあつたかもしれないけれども、また殺すべきものではないもの、という、衆生愛というものがあるではないであらうか。牛を



殺した報いとして牛の子が生まれる、それはこわいということもありましょうが、牛といえどもこの世の中へ生を受けたところの生物ではないか、それを殺すということはすまんことであるという生物愛、衆生愛と申しましょうか、そういうものが原始人にあつたのではないだろうか。原始人といえは一切がつまらぬもので、いいものは何も無いように考えていますけれども、そうではない。知識からいえばかばかしいようなものであつても、その底に衆生愛というものがある。その衆生愛は、今日のわたくしたちにも残っているようであります。

若いころ動物園などに行きまして、あのこわいシシのりの前でジツと見ておると、シシのりをあけて、お前、お前そこにおつたかと抱きつきたいような気持ちになつたこともあります。あなたたちはそういう経験がないかもしれませぬけれども。こわいには違いありませんがジツと見るとおと血の通いがあるような感じがしました。こうなると、越後生まれの野蠻人であるといわれてもかまいません。そういうものが感じとして、上田敏の翻訳された詩の中に、フカザメを歌うた一句だけを覚えております。

行きね妖怪（妖怪）、なれが身も人間道に異ならず

醜悪、獐猛、暴戾のたえて異なるふしも無し。  
心安かれ、饜ざめよ、明日や食らはむ人間を。

又さはいへど、汝が身も、明日や食はれむ、人間に。という一句を覚えております。フカザメ、人食いザメだといつてけなされ、こわがられてあるけれども、心安かれ、そんなに心配するな、人間道も異ならず、人間も大したちがいはないんだよ、こういわれておりますあの一句が忘れられないのであります。何かそういう感じがわたくしたちの上に残っておるのであります。

そういえば、思い出しましたが、長野県の小学校の生徒の書いた詩だそうであります。かたわらの動物を見て、同じようにこの地上に生を受けながら、お前たちを動物と呼んで、われわれは人間だというておるんだよ、という詩があるそうであります。わかりますね。いや、もう一つもうしますと、動物だけではない、植物でもそうであります。初めて京都へ出て、大きな屋敷の家を借りたことがあります。そのときに、一袋の花の種を買ってきてミカン箱の中へまいたのですが、たくさんたくさん芽が出ました。それをみんな育てるわけにはいからず、手当たりしだいに、よさそうなものだけ五、六本取って、あと皆捨ててしまふ。

その時です。どうしてこの五、六本だけが育つ運命があり、あとのものは捨てられなければならないのかという妙な悲しみを感じたことがあります。こういうものが、案外文化人には忘れられておつても、原始的のものであつて、それがわれわれの心のふるさとにもなつているのでしょう。ここに衆生愛というものがあるのではないであらうか。

そういたしますと、浄土真宗では迷信に陥つてゐるものを、邪教だとしておりますが、しかしそれは知識で批判をするのとは違つて、何か悲しい感情を以てのもののようにであります。

### 本願の正義

それで『教行信証』などを見ますと、迷信に陥ることはかえつて鬼神にとりつかれて幸福を受けるつもりで不幸に陥るのであるというように表現してある。それはそういう迷信にある人間の気持を純化して、その衆生愛だけを残していこうというもののように思われる。そうしますと、如来の本願の正義、阿彌陀仏のお心の相手はその迷信に陥り易い人間であるということになりましょう。病気になる

と医者にかかる、治らない、それではお薬師さまに行こうかしらんと、そのような人間が大悲の本願の相手ではなかつたであらうか。そんなのが凡夫というものであらう。だから特にいとしく悲しいのはそういう邪道に陥るものであるにちがいない。邪道に陥るのはけしからんと、この知識的な立場であつて、大悲のころろではない。原始的なよいものを持つておりながらつゝ邪道に陥つてしまふ、それが悲しい大慈大悲の仏心ではないであらうか。

そこで、彌陀の本願というものは、十方衆生と呼ばれてゐる。その心持は、けっきょくこの世の幸福がほしい、何とか利益がほしいということよりほかない、その人間に人生の自覚を与えたいということであるといふことを思い直してみたいのであります。そこに羣萌の宗教というものは、文化人の理性でもつて整理され、理性的に邪道に陥るはずのない人間の宗教でなくして家を建てれば方角を気にし、結婚するには日の良し悪しを心配する。そのような凡夫の感情を洞察してのものであります。そうすると彌陀の本願の相手は、ただこの世の利益よりほか思わないものである。そういう者を相手にまことの道を知らせたい、それが浄土の教えというものであらうかと気がついたのであります。